青年における恋愛観と親子関係

The relationship between the adolescent's view of love and parent-child relations

宮下　一博・村山　真澄

Kazuhiro MIYASHITA and Masumi MURAYAMA

問題と目的

青年期は，異性への関心の増加に伴い，様々の恋愛を経験していく時期である。Hurlock(1973)は，そうした恋愛の発達について，段階Ⅰ（のぼせ上がりと英雄崇拝の段階），段階Ⅱ（子犬の恋の段階），段階Ⅲ（デートの段階），段階Ⅳ（ステディの段階），段階Ⅴ（ピンニングの段階），段階Ⅵ（婚約の段階），段階Ⅶ（結婚の段階）という7段階を設定している。一般的には，段階Ⅰは思春期の中学生前後の時期，段階ⅥやⅦは大学生あるいはそれ以降の時期に相当するであろう。

恋愛の問題は青年期の重要なテーマであるにもかかわらず，研究自体はそれほど進んでいるとはいえない。恋愛に関しては，心理学の領域では，青年心理学（Hurlock,1973; 加藤,1987; 西平,1988など）や社会心理学（Rubin, 1970; 井上，1985など）が独自の取り組みを行っているが，松井（1990）も指摘するように，恋愛研究は，「現在のところ，恋愛時の行動や感情に関する実態的な資料や，恋愛を捉える基礎的な理論枠組みさえもできていない状態」なのである。これは，西平（1988）が述べるように，「友情とか恋愛というテーマは，心理学的に追求することが難しい」ということが大きな原因なのかもしれない。

ところで，最近，松井は青年期の恋愛に関して多数の研究を発表し（松井・戸田,1984,1985; 戸田・松井,1985; 松井,1990; 松井ら,1990;松井,1993a），著書としてもまとめる（松井,1993b; 松井・井上,1994）など，精力的に青年期の恋愛研究に取り組み，優れた知見を積み重ねてきている。その成果の一つに，Lee(1973,1974,1977)の恋愛理論に基づく恋愛意識を測定する質問紙（Hendrick et al.,1988）の邦訳と尺度化があげられる（松井ら,1990；松井, 1993aなど）。これは，LETS-2(Lee's love type scale second version)とよばれるもので，Leeの恋愛理論に基づく6つの恋愛類型（Mania, Eros, Agape, Storge, Pragma, Ludusの6つ）を測定しようとする尺度である（Table 1に各類型の特徴を示す）。恋愛意識（感情）を客観的に捉える尺度としては，Rubin(1970)の恋愛感情尺度が有

Table 1　Leeの恋愛類型論における各類型の特徴（松井，1993a）

名　称	特　　徴
Mania (狂気的な愛)	独占欲が強い。嫉妬、憑執、悲哀などの激しい感情を伴う。
Eros (美への愛)	恋愛を至上のものと考えており、ロマンチックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し、強烈な一目惚れを起こす。
Agape (愛他的な愛)	相手の利益だけを考え、相手のために自分自身を犠牲にすることも厭わない愛。
Storge (友愛的な愛)	穏やかな、友情的な恋愛。長い時間をかけて、愛が育まれる。
Pragma (実利的な愛)	恋愛を地位の上昇などの手段と考えている。相手の選択においては、社会的な地位の釣合など、いろいろな規準を立てている。
Ludus (遊びの愛)	恋愛をゲームと捉え、楽しむことを大切に考える。相手に執着せず、相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と恋愛できる。

名であるが，この「LETS-2」も，今後，青年期の恋愛を研究する上で重要な位置を占めていくように思われる。また，青年期における恋愛の失敗，すなわち失恋を扱った研究（Hill et al.,1976；大坊,1988；飛田,1989；宮下ら，1991など）も多いとはいえないが，この点に関しても Leeの類型論は有効ではなかろうか。

さて，これまでの青年の恋愛（失恋も含む）に関する実証的研究は，恋愛意識（感情）・行動の実態調査やその発達プロセスの研究，あるいは社会心理学的な対人魅力の観点からの研究などが中心であり，その要因について検討した研究はほとんど見当たらない。本研究では，親子関係（親の養育態度）に焦点を当て，青年の恋愛観（意識）との関係を検討することにより，その形成のメカニズムの一端を明らかにしたいと思う。

方　法

被験者　千葉大学生男子52名，女子66名の合計118名。

質問紙　(1)　**恋愛観（恋愛意識）を測定する尺度**：松井ら（1990）により作成された「LETS-2」を使用。これは，家族以外で最も親しい異性を一人思い浮べてもらい，その異性との関係等について，回答を求めるものである（本研究では，7段階評定を使用）。なお，「LETS-2」は，Table 1に示す6つの恋愛類型を把握しようとするもので，計57項目からなる。

(2)　**親子関係を測定する尺度**：辻岡・山本（1976）の作成した「親子関係診断尺度 EICA」を使用。「情緒的支持」，「同一化」，「統制」，「自律性」の4下位尺度各10項目，計40項目から構成され，父親・母親別に回答を求める（3件法）。なお，この4つの下位尺度（一次因子）は，その順に2つずつ，各々「受容」，「統制」と命名される二次因子を構成している。

実施時期　1994年10月上旬～下旬。

実施方法　上記2種の質問紙を授業場面を利用し集団的に実施した。

結果の処理法

「LETS-2」は，得点が高いほどそれぞれの恋愛類型の傾向が強くなるよう各項目に7～1点を付与し，各類型得点を算出した。また，「EICA」は，各項目に2～0点を与え，4つの下位尺度（一次因子）得点，ならびに二次因子得点を算出した。

この「LETS-2」の各類型得点と，「EICA」の2種類の因子得点とのピアソンの積率相関係数を算出することにより，以下の分析を行った。

結果と考察

Table 2には男女込みの全体の結果を，Table 3と Table 4にはそれぞれ男女別の結果を示した。

まず，Table 2から男女込みの全体の結果を見ると，Maniaは，父親の「同一化」ならびに「受容」の養育態度と正の，母親の「情緒的支持」，「同一化」，「受容」と正のそれぞれ有意な相関が得られた。また，Erosは，母親の「同一化」，「受容」の養育態度と正の，Agapeは，母親の「情緒的支持」，「同一化」，「受容」と正のそれぞれ有意な相関が得られた。しかし，Storge，Pragma，Ludusは，父親・母親の養育 態度とは全く有意な相関はみられなかった。

次に，男子の結果（Table 3）を検討すると，Maniaは，父親の「同一化」と正の，母親の「同一化」，「受容」と正のそれぞれ有意な相関がみられた。また，Erosは，母親の「情緒的支持」，「同一化」，「受容」の養育態度と有意な正の相関が，AgapeもErosと同様，母親の「情緒的支持」，「同一化」，「受容」と有意な正の相関が得られた。Storgeは，父親の「同一化」と有意な負の，Pragmaは，父親及び母親の「統制」（二次因子）と有意な負の相関が得られた。しかし，Ludusについては，有意な相関はみられなかった。

続いて，Table 4から女子の結果を見ると，Maniaは，母親の「受容」の養育態度と有意な正の，Erosは，母親の「同一化」と有意な正の，Ludusは，父親の「情緒的支持」，「受容」と有意な負の，「統制」（二次因子）と正の有意な相関がそれぞれ認められた。Agape，Storge，Pragmaについては，有意な相関は得られなかった。

Table 2　恋愛観と親子関係との関連（全体）

		Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma	Ludus
父親	情緒的支持	.114	.042	.121	-.023	.099	-.096
	同一化	.207 *	.042	.121	-.146	.129	-.028
	統制	-.006	-.070	.050	-.084	.120	.062
	自律性	-.122	.115	-.101	.044	-.088	.086
	受容	.181 *	.063	.093	-.094	.129	-.072
	統制	.181 *	.063	.093	-.094	.129	-.072
母親	情緒的支持	.174 *	.111	.234 **	-.109	.105	-.098
	同一化	.292 **	.274 **	.294 **	-.019	.036	-.122
	統制	.117	.013	.114	-.040	.130	-.043
	自律性	-.074	.136	-.100	.018	-.034	.070
	受容	.273 **	.227 **	.308 **	-.073	.081	-.128
	統制	.022	.130	-.008	-.015	.075	.064

（注）父親・母親の欄とも上の４つがEICAの一次因子を，下の２つが二次因子を示す。

** $P<.01$　* $P<.05$

Table 3　恋愛観と親子関係との関連（男子）

		Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma	Ludus
父親	情緒的支持	.099	.158	.150	-.060	.100	.106
	同一化	.240 *	.127	.052	-.291 *	.073	.111
	統制	-.049	.012	.051	-.154	.104	-.079
	自律性	-.078	-.036	-.057	.090	-.167	.154
	受容	.189	.166	.120	-.192	.100	-.125
	統制	-.114	-.020	-.015	-.033	.242 *	.088
母親	情緒的支持	.157	.251 *	.379 **	-.051	.224	-.098
	同一化	.403 **	.356 **	.466 **	-.010	.152	-.149
	統制	.156	.060	.178	-.097	.192	-.147
	自律性	-.029	.089	-.015	.034	-.179	.156
	受容	.325 **	.350 **	.487 **	-.035	.215	-.104
	統制	.112	.130	.144	-.054	.342 **	.018

（注）父親・母親の欄とも上の４つがEICAの一次因子を，下の２つが二次因子を示す。

** $P<.01$　* $P<.05$

Table 4　恋愛観と親子関係との関連（女子）

		Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma	Ludus
父親	情緒的支持	.117	-.011	.108	-.020	.024	-.284 *
	同一化	.171	.037	.037	-.033	.082	-.148
	統制	-.022	-.111	.052	-.038	.101	.145
	自律性	-.154	.171	-.158	-.010	-.110	.063
	受容	.165 *	.050	.084	-.007	.060	-.248 *
	統制	-.133	.005	-.105	-.051	.002	-.221 *
母親	情緒的支持	.186	.020	.116	-.157	.051	-.184
	同一化	.163	.207 *	.147	-.024	-.055	-.102
	統制	.065	-.068	.060	.017	.066	-.047
	自律性	-.102	.111	-.180	-.011	-.035	.029
	受容	.204 *	.141	.156	-.102	-.062	-.165
	統制	-.056	.064	-.146	.003	.017	.071

（注）父親・母親の欄とも上の４つがEICAの一次因子を，下の２つが二次因子を示す。

* $P<.05$

以上より，青年の恋愛観（意識）と親子関係（親の養育態度）との関連について考察する。

第一に，松井（1993a）他の研究から考えると，6つの恋愛類型の中では，Mania，Eros，Agapeの3つが比較的成熟した青年の恋愛類型と判断され，Storge，Pragma，Ludusの3つは，それらよりやや発達段階の低い恋愛類型と考えられる。この観点から本研究の結果をみると，有意であったものでは，Table 2（全体），Table 3（男子），Table 4（女子）のいずれにおいても，成熟した恋愛類型（Mania，Eros，Agape）は両親の肯定的な養育態度（「情緒的支持」，「同一化」，「受容」）と正の対応が得られ，やや未熟な恋愛類型（Storge，Pragma，Ludus）は，有意なものこそ少ないが，両親の肯定的な養育態度（「情緒的支持」，「同一化」，「受容」）と負の，否定的と思われる養育態度（二次因子の「統制」）と正の対応が得られた。このことは，成熟した恋愛観（意識）が両親の肯定的な養育態度と関係し，未熟な恋愛観（意識）が否定的な養育態度と関係していることを意味し，妥当な結果と考えられる。「自律性」の養育態度が，恋愛類型と関係がみられなかったのは意外な気もするが，受容や支持という信頼や愛情で結ばれた暖かい親子関係のあり方が青年の成熟した恋愛観（意識）と結びついているという結果は，重要な示唆を含んでいると思われる。

第二に，恋愛観（意識）との関係では，全般的に，父親よりも母親の養育態度の方が多くの有意な関係が得られている。昨今，父親は母親と比べて子ども（青年）との関わりが物理的に（場合によっては精神的にも）少ないというのが通例であり，恋愛観（意識）においてもそうしたことの影響が予想される。あるいは，「恋愛観（意識）」というようなデリケートな心理の側面においては，そもそも母親の役割の方が大きいということを示唆しているのかもしれない。しかし，男子においてManiaが父親の「同一化」と正の，Storgeが「同一化」と負の，Pragmaが「統制」（二次因子）と正の関係を示していること，女子においてLudusが「情緒的支持」，「受容」と負の，「統制」（二次因子）と正の有意な関係を示していることから，愛情の乏しい厳格な父親の態度は青年の未熟な恋愛観（意識）と関係しており，父親のあり方も少なからず関連を有しているといってよいのではなかろうか。

第三に，Table 3（男子）とTable 4（女子）を比べてみると，男子の方がはるかに多くの有意な相関を示している。しかも，「母親」との関連において，相対的に高い相関係数が得られており，それもMania，Eros，Agapeといった比較的成熟した恋愛類型において顕著である。男子青年にとって，母親は最も身近な異性のモデルの一人であり，母親との関わりが青年の恋愛観（意識）と関係をもつのはある意味で当然である。男子青年にとっての母親の重要性が，本研究からも確認されたといえる（しかし，男子青年の恋愛観（意識）と母親の養育態度との関連がやや強いということは，別の言いかたをすれば，男子青年と母親との心理的距離が近くなっているということであり，近年問題となっている男子青年の自立性をめぐる問題も視野に入れておくことが必要なのかもしれない）。

問題は，女子の方である。女子（Table 4）においては，有意な相関が少ないのみならず，その数値自体も男子と比べてかなり小さいものとなっている。男子よりも女子の方が父親・母親の影響が強いのではないかと考えていたが，むしろ逆の結果であった。この点に関しては，女子では「恋愛観（意識）」の問題は，家庭よりも友人などの影響が大きいことを示すものかもしれないが，近年の女子の自立意識の高まりも無関係とはいえないであろう。すなわち，近年，女子青年の人格形成の場は，相対的に家庭から学校社会や一般社会へと移行している部分があることも予想され，そうしたことが影響した可能性も考えられる。近年の性役割のボーダレス化などを背景に，男子青年，女子青年の心理面には従来とかなり異なる面が生じつつあるのも事実である。「女性が強くなり，男性が弱くなった」というような言葉も耳にすることが多くなった。大学内で，それを実感させられることも増えてきている。本研究で得られた結果が，単なるサンプルなどの偶然によるものなのか，あるいは上述のような男女の心性の質的な変化が反映されたものなのかについては，今後の青年の心理に関する様々の研究を吟味する中で，徐々に明らかにされるであろう。

最後に，本研究の問題点を指摘しておきたい。まず，被験者数の問題である。もう少し被験者数を増やした研究ができれば，より多くの有意な関係も抽出でき，より明確な結論が得られた可能性もある。また，本研究では，青年の恋愛観（意識）の一つの要因として親子関係（親の養育態度）を取り上げたが，これ以外の様々の要因がこれに関与していることは当然である。今後，そうした変数を整理・充実させた研究が期待される。

引用文献

大坊郁夫　1988　異性間の関係崩壊についての認知的研究　日本社会心理学会第29回大会発表論文集，64-65.

Hendrick,S.S.,Hendrick,C.,& Adler,N.L. 1988 Romantic relations : Love, satisfaction, and staying together. *Journal of Personality and Social Psychology,* 54, 980-988.

飛田操　1989　親密な対人関係の崩壊に関する研究　福島大学教育学部論集，46, 47-55.

Hill,C.T.,Rubin,Z.,& Peplau,L.A. 1976 Breakups before marriage:The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues*, 32, 147-168.

Hurlock,E.B. 1973 *Adolescent development. 4th ed.* New York: Mc-Graw-Hill.

井上和子　1985　恋愛関係におけるEquity理論の検証　実験社会心理学研究，24, 127-134.

加藤隆勝　1987　青年期の意識構造・その変容と多様化　誠信書房

Lee,J.A. 1973 *The colours of love.* DonMills, Ontario: New Press. (Lee, 1974による)

Lee,J.A. 1974 The style of loving. *Psychology Today*(October), 43-51.

Lee,J.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 3, 173-182.

松井豊　1990　青年の恋愛行動の構造　心理学評論，33, 355-370.

松井豊　1993a 恋愛行動の段階と恋愛意識　心理学研究，64, 335-342.

松井豊　1993b　恋ごころの科学　サイエンス社

松井豊・井上果子　1994　恋愛を科学する　ポプラ社

松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美　1990　青年の恋愛に関する測定尺度の構成　東京都立立川短期大学紀要，23, 13-23.

松井豊・戸田弘二　1984　青年の恋愛行動の構造について（1）　日本心理学会第48回大会発表論文集，557.

松井豊・戸田弘二　1985　青年の恋愛行動の構造について（2）　日本心理学会第49回大会発表論文集，427.

宮下一博・臼井永和・内藤みゆき　1991　失恋経験が青年に及ぼす影響　千葉大学教育学部研究紀要，39, 117-126.

西平直喜　1988　友情・恋愛の探求　大日本図書

Rubin,Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.

戸田弘二・松井豊　1985　大学生の愛着構造と異性交際　心理学研究，56, 288-291.

辻岡美延・山本吉廣　1976　親子関係診断尺度EICA検査用紙・実施手引　日本・心理テスト研究所